

CULTURE

カルチャー

● 人と自然の新たな関係 — アジாமンスーンの視点から

総合地球環境学研究所・所長 安成哲三



農業革命の次に起こった大転換は18世紀西欧での産業革命です。工業化と都市文明を中心とする「近代化」は、石油・石炭などの化石資源の使い過ぎによる「地球温暖化」を引き起こし、地球規模で現代の文明を脅かしているといえます。さらに、「近代化」は、持てる国(地域)と持たざる国(地域)の格差を広げており、環境悪化を引き起こしてきた。持てる国に対し、持たざる国がノーをつきつけているという、地球社会の構造も作り出しています。

一方で皮肉なことに、長い年月にわたるこうした人類の営みそのものが、多くの古代文明を終わらせた大きな環境要因のひとつにもなりました。穀物栽培を同じ土地で毎年繰り返して行うことによる地中への塩分の蓄積、農地の拡大や都市化のための森林伐採による砂漠化などによって、農業を困難にしました。さら

環境を変えた人類

人類と自然の関係を考える上で、人類史の最初の大転換は、最終氷期が終了した約1万年前に開始された農業革命でした。エジプト、メソポタミア、インダス、黄河・長江地域の古代文明は有名ですが、いずれも適当な気候(光と気温)と水と肥沃な土地を前提にした穀物栽培、すなわち農業の成立が、その前提になっています。農業の維持は、人間が定住して食糧を確保できる仕組みとしての基本であり、それによって都市や国といった社会の形成が可能になったといえます。

共生続けた地域で

そもそも人類はなぜ自らの生存基盤である地球の環境を変えてしまうのでしょうか。環境問題の本質には、人類が作り上げてきた文明と何かなという大きな課題があるのです。

長く、文明と自然の共生が続けられた地域もあります。わが国を含む東アジアから東南アジア、そして南アジアの「モンスーンアジア」とよばれる地域です。この地域では温帯なアジாமンスーン気候が支配し、雨季乾季の季節変化や地形を利用した水田という独特の方式の稲作農業が数千年以上続き、中近東や黄河地域での古代文明とは異なり、すぐれた持続可能な文明を可能とてきました。そのため、西欧の産業革命以前から、この地域は人口や生産力も世界で最も大きな地域となっていました。私たちのこれまでの研究では、温帯なモンスーン気候の維持に、チベット高原などの山岳効果



モンスーンアジア特有の水田風景。日本の山間地では、このような棚田での耕作が江戸時代から続けられてきた
(2017年5月3日、京都市右京区嵯峨嵯原)一小型無人機から



「足るを知る」循環型の社会へ

やすなり・てつぞう 1997年、京都大学理学部卒業。京大東南アジア研究センター助手、筑波大学名誉博士などの教授を経て、2013年から現職。専門は気候学・気象学、地球環境学。

に加えて、陸地を広く覆う森林、そして水田そのものも、大きく効いていることが分かってきました。しかし、水田稲作農業とそれに伴う高度な伝統的文明を維持してきたこの地域は、西欧由来の資本主義経済と科学技術の受け入れによる「近代化」の進行も速いものでした。特に20世紀後半以降は、工業生産に伴う温室効果ガスの急増や大気汚染の進行、森林伐採による生態系劣化や地域降水量の減少など、地球環境への負荷でも世界のホットスポットとなっています。モンスーン気候の地域では、気候と地表面の植生の間の相互依存性が強いので、人間活動による森林破壊などの植生の改変などにより、その地域の気候も容易に変わってしまうという特性もあるのです。

今、人と自然の間の、より持続的な関係を取り戻すためには、人類も生命圏の一員であり、地球と共に生きるという人類を意識した文化の創成と新たな科学・技術の展開が必要です。「無限の成長」ではなく、アジアの伝統的知でもある「足るを知る」にもとづき、多様な自然と共生できる水・エネルギー・食料の循環型システムを基本としたネットワーカー型社会をめざしていくべきでしょう。

京都には、海・森・山・川など豊かな自然と生業、千年の都で培われた伝統と文化があります。これらの相互のつながりを生かした未来に向けた地域社会の新しいモデルを、世界に先駆けて創っていくのではないのでしょうか。総合地球環境学研究所(地球研)では、このような多様な地域と地球全体をつなげる、人と自然の未来への可能性を、地域社会とも組んで、さまざまな角度から探っています。

地球温暖化や海洋汚染、森林破壊…。多くの環境問題は、私たちの人間の価値観や自然観、生き方そのものを映し出している。日々の暮らしから遠い世界で起きているのではない。自然科学と人文・社会科学の知見を融合させながら問題の解決を模索する国立の研究機関・総合地球環境学研究所(地球研)。京都市北区上賀茂を拠点に、世界を駆け回る研究者のフィールドノート(実地調査記録)を通じて、「地球からの声」をお届けします。

＝第2水曜に掲載します